

## 【太政大臣兼家】

「そのほどは、夢ときもかむなぎも、かしこき者どものはべりしぞとよ。堀河の摂政（兼通）のはやりたまひし時に、この東三条殿（兼家）は、御つかさも停められさせたまひて、いと辛くおはしましし時に、人の夢に、かの堀河院より、矢をいと多く東ざまに射るを、いかなるぞと見れば、東三条殿に皆落ちぬと見えけり。

1 よからず思ひ聞こえさせたまへる方より、矢のおはせたまふは、<sup>2</sup> 悪しきことならむと思ひて、殿に申しければ、おそれたまひて、夢ときに問はせたまひければ、<sup>3</sup> 「いみじうよき御夢なり。世の中の、この殿にうつりて、あの殿の人の、さながら参るべきが見えたるなり」と申しけるが、<sup>4</sup> あてざらざりしことかは。

また、その頃、いとかしこきかむなぎはべりき。賀茂の若宮のつかせたまふとて、臥してのものを申ししかば、「うち臥しの巫女」とぞ、世人つけてはべりし。

おほにふだうどの  
大入道殿に召して、もの問はせたまひけるに、いとかしこく申せば、<sup>5</sup> さしあたりたること・過ぎにし方<sup>かた</sup>のことは、皆さ言ふことなれば、しか思しめしけるに、かなはせたまふことどもの出でくるままに、後々には、御装束たてまつり、御冠<sup>かぶり</sup>させたまひて、御膝に枕をせさせてぞ、ものは問はせたまひける。それに一事として、後々のこと申しあやまたざりけり。さやうに近く召し寄するに、いふかひなきほどのものにもあらで、少し御許<sup>おもと</sup>ほどのきはにてぞありける。

〔注〕○夢とき——夢の吉凶を判断する人。 ○かむなぎ——巫女<sup>みこ</sup>。 ○はやりたまひし——栄えていらつしやった。 ○矢のおはせたまふ——矢を受けなさる。 ○賀茂の若宮——上賀茂神社の末社の一つか。 ○大入道殿——兼家のこと（子の道長を「入道殿」と呼ぶのに対して）。この時点ではまだ出家（入道）はしていない。 ○御許——女房。

【語彙・文法】（○Ⅱ語彙・●Ⅱ文法・☆Ⅱ常識。ただし重なるところも）

- かしこき ☆つかさ ●落ちぬ ●思ひ聞こえさせたまへる ○悪し ○いみじ  
○さながら ●参るべき ●ざらざりし ●かは ○臥す ○さしあたる ○過ぎにし方  
○たてまつる ○申しあやまつ ○いふかひなし ○ほど ○きは

【問い】

- ① 点線部1「よからず思ひ聞こえさせたまへる方」とはどういうことか（具体的に）。

- ② 点線部2「悪しきことならむと思ひて」とあるが、誰が、どうしてそう思ったのか。

- ③ 点線部3「いみじうよき御夢なり」と夢ときが言ったのはなぜか。

- ④ 点線部4を品詞分解して現代語訳せよ。

あて ざら ざり し こと か は

- ⑤ 点線部5「さしあたりたること・過ぎにし方のことは、皆さ言ふことなれば、しか思しめしけるに」とはどういうことか（簡潔に）。

【文法基礎練】使役・尊敬の助動詞

	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
す							
さす							
しむ							
（下接語）	―ば	―けり	―。	―とき	―ども	―!	

意味 ① 使役（ ） ② 尊敬（ ） ※

※尊敬の意味となるときは、必ず下に尊敬語を伴う（下が尊敬語でも使役の場合も）

☆今回の本文中では、①②の意味はそれぞれ何回使われているか。

接続 （す）

（さす）

（しむ）

【現代語訳】

その時代は、夢解きも巫女も、優れた者たちがおりましたそうですよ。堀河の摂政（兼通）殿が栄華を極められていた時に、この東三条（兼家）殿は、御官職も停止されなされて、たいへん苦境にいらっしゃった時に、ある人の夢で、その兼通殿のお邸から、矢をたいへん多く東に向けて射るのを、どういふことだと思つて見ると、兼家殿のお邸にみな（矢が）落ちた、という夢を見た。（兼家殿を）良くなく思い申し上げていらっしゃる所（兼通殿）から、（兼家殿が）矢を受けなされるのは、悪いことであろうと思つて、（兼家）殿に申し上げたところ、（兼家殿は）恐れなされて、夢解きにお尋ねになったところ、「たいへんよい御夢である。世の中が、みなこの殿（兼家）に移つて、あの殿（兼通）に仕えている人が、そっくりそのまま参上するはずの運命が夢に現れたのである」と申したのは、当たつていなくもなかったというほどのことか（それどころではない、まさにその通りになったのだ）。

また、その頃に、とても優れた巫女がおりました。賀茂の若宮が（巫女に）お取り憑きになると称して、必ず横になったまま託宣を申したので、「うち臥しの巫女」と、世間の人々はあだ名をつけておりました。（この者を）大入道殿（兼家）のお邸にお呼びになり、ものをお

尋ねになったところ、たいへんみごとに託宣を申し上げたので、現在直面していること・過去のことは、みな（この巫女が）そう言う通りなので、（兼家殿も）そう（この巫女の言うことは真実だと）お思いになったが、（さらにそれ以後のことも）的中なさることが何度も出てくるうちに（兼家殿はこの巫女を深く信頼されて、後々には、ちゃんと束帯をお召しになり、御冠をおかぶりになって、（兼家殿の）お膝に枕をさせてやって、ものをお尋ねになったのだった。それで一つとして、将来のことを予言しそこなうことがなかった。そのように（兼家殿の）近くにお呼び寄せになるからには、（うち臥しの巫女は）まったく話にならない低い身分の者でもなくて、ちょっとした女房という程度の身分の者であった。

【参考】『今昔物語集』卷三十一の第二十六

今は昔、打臥の御子といふ巫世に有りけり。昔より賀茂の巫といふ事は聞かぬに、これは賀茂の若宮の託かせ給ふとぞ云ひける。「何なればかく打臥の御子とは云ふぞ」と思へば、打臥してのみ物を云ひければ、打臥の御子とは云ひけるなりけり。

京中の上中下の人、挙りて物を問ひけるに、過ぎにし方の事、行末に有るべき事、當時有る事など惣てかれが云ひたる事、露ばかりも違ふ事無かりければ、世の人皆、首を傾けて手を造りてこれを信じ貴びけり。畢には法興院も常に召して問はせ給ひけるに、かく正しく艶ず物を申しければ、深く信ぜさせ給ひて、常に召しつつ、御冠を奉り紐を差させ給ひて、御膝の上に枕をせさせ給ひて問はせ給ひけるに、思し召しける事に叶ひけるにこそ、常に召して問はせ給ひけるなり。

然れどもこれを受け申さぬ人も有りけり。万の事露違はず申し叶ふとは云ひながらも、然ばかりの人の御膝に枕をせさせて、巫に物を問はせ給ひけることの頗る落居させ給はぬ様なれば、これを受け申さぬ人も理なりとなむ語り伝へたるとや。

〔注〕○首を傾けて手を造りて——頭を下げ手を合わせて。 ○法興院——兼家のこと。

